

# フィジーの気候変動認証プログラムのマルチステークホルダー分析

Anuantaeka Takinana

キーワード：ステークホルダー、コミュニケーション、気候変動レジリエンス教育、高等教育

## 1. 研究の背景と研究目的

高等教育機関（HEI）における気候変動教育は、深刻化する気候変動の影響に直面している学生たちや地域社会のメンバーが、その緩和に取り組み、影響に対して適応していくために必要な知識と能力を促進するために重要な分野として認識されている。しかしながら、気候変動研究の複雑さやその学際的な性質により、効果的なカリキュラムを有する講座を設計する難しさが指摘されてきた。

本研究が対象地域とするフィジーでは、2016年、南太平洋では初のカテゴリー5レベルのサイクロンであるウィンストンによって壊滅的な被害をもたらされた。これを機にフィジーでは地域社会の気候変動に対するレジリエンスを向上させることを目的に、太平洋諸国で初の高等教育における気候変動教育の講座がスタートした。本調査では、当初、地域の人々の在来知を取り入れ、多様なステークホルダーが関わるのが構想されていた当講座において、実際にはどのようなステークホルダーが参加していたか、また彼らはどのような役割を担い、プログラムや他のステークホルダーにどのような影響を与えたかを明らかにするとともに、当講座に参加した最初のグループである学生たちの認識の把握を試み、改善のために効果的な提言を行うことを目的とする。

## 2. 研究方法

サウスパシフィック大学の気候変動レジリエンスプログラム 3 および 4 に関する講座の受講生に対し、コースの内容とその実態についてオンラインでのアンケート調査を実施し、結果として合計 22 名の学生のうち 18 名から回答が得られた。調査後、気候変動レジリエンスプログラムに関わるステークホルダーとして、学生 8 名、コンサルタント 2 名、ファシリテーター 1 名、フィジー高等教育委員会委員 2 名のメンバーからなる 13 名への半構造化インタビューを行った。インタビューの逐語録は、単語パターンを強調表示できる分析ソフトウェア Atlas Ti を使用して分析を行った。さらに、気候変動レジリエンスプログラム 1 の開発を支援しながら、同様のコース開発プロセス（3 および 4）の参与観察を行った。

## 3. 研究結果と結論

分析の結果、プログラムの開発と実施において、参加していたステークホルダー間の不均衡が明らかとなり、コースの目標と内容を決定する上ではビジネス部門に最も影響力があることが示された。このことは、当講座の目的が、当初の構想であったコミュニティでの気候変動レジリエンスの向上から、ビジネス上におけるレジリエンスの促進を支援に変化してしまったことを表している。また、この不均衡は、講座内で出されたプログラムの改善点に関する、ステークホルダー間のコミュニケーションに支障をもたらしたことも確認された。加えて、学生と地域社会のメンバーは講座の開発に関与していないこと、学生は講座で提供される課題が多すぎることの負担と当講座の過度なビジネス志向を感じていることが明らかになり、現状が高等教育レベルでの気候変動レジリエンス研究発展への動機を失わせることにもつながりうる事が指摘できる。以上の結果から、すべてのステークホルダーがプログラムの改善点について議論するためのマルチステークホルダープラットフォームを開発する必要性が示唆された。